神の国と金銭

20 年前に母国オーストラリアへ行った時に、ある日前もって連絡しないで従兄弟の家に遊びに行った。従兄弟達はトランプをやっていたが、私が車から降りて来るのを見ると隠してしまった。私が司祭ということでトランプを良く思わないと従兄弟達は思っていたようだ。なぜか良くわからないけれど、キリスト者の中で大きな罪は、良く聞く話ではアルコールと性とギャンブルだ。これは面白い事だ。福音書にはイエスはアルコール、性、ギャンブルの事は殆ど話されていない。（カナの婚礼でイエスは水をぶどう酒に変えた。ヨハネ 2：１－10）

前に言ったように、イエスの時代のイスラエルに大きな貧富の差があった為に、多く人々は貧しくて苦しんでいた。イエスはその状態を変えたい思っていた。社会を作り直したいと思っていた。それでその問題の責任を持っていた人々、つまり社会の権力者、支配者をイエスはよく非難した、またその人々はイエスの事をよく非難した。話を聞き行動を見て、怒ってイエスを批難した。最後にイエスを捕まえて処刑してしまった。だからイエスにとって大きな罪と言うのは、酒、性、ギャンブルではなくて、権力，権威、威信、と、お金，財産、富関係の罪だったのだ。社会の支配者、権力者が貧しい人々を抑圧し搾取した為、多くの人々を苦しめた。これが最大な罪：権力、威信、富。それでイエスは小さな人々と関わった時に、神様の事を教えた時によく神の国を話していた。イエスが教えて下さった祈りの中でも出て来る。御国が来ますように。（マタイ 6: 10） イエスは神の国を話していた。よく神の国について説明していた。

例えばマタイ 19：23－24 にイエスがおっしゃったのは「はっきり言っておく。金持ちが天の国に入るのは難しい。重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」どういうことか。これはイエスの話の中で一番厳しい話かもしれない。

まず、神の国は皆平等で金持ちも貧しい人もいない。金持ちはいない。その為、金持ちの人が神の国へ入る前にその富を捨てなければならない。金持ち

のまま入ることは出来ない。中には皆平等で金持ちでなくなるから入りたいと思わない人もいるだろう。

私達は神様の事を信じていないため、神様がどんな事があっても守ってくださることを信じていないため、自分で自分を守りたいと思う。その為お金や財産がほしいのだ。また、マタイ 6：24 にイエスははっきりとおっしゃる：「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

アッシジの聖フランシスコはこの事実がよく解っていて、父親の沢山の財産や威信を捨ててしまって自分からホームレスになってしまった。私達はホームレスの人々を尊敬せず軽蔑するのに、聖フランシスコとマザーテレサを尊敬しているという事だ。

教会の中にも司教，司祭の中にもこの富に関する話、威信、権力に関する話をまだ理解していない人が少なく無いと思う。4 世紀のコンスタンティヌスの時から教会は強い権力を持っている、また凄い財産を持っている。イエスは何も持っていなかったのに教会は沢山持っている。教会にも考え直し改心して悔い改める必要がある。

信仰

マルコの 5 章の 34 にイエスは 「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らしなさい。」 とおっしゃる。「あなたの信仰があなたを救った。」私があなたを救ったのではなくて、あなたの信仰があなたを救った。イエスは一人一人に神様に対する信仰を起こそうと思ったのだ。そのため人々に神の国のことを教えたのだ。それで、この信仰についてちょっとだけ言いたい。

私はロシアに行った事はないけど、ロシアの都はモスクワだと信じている。見た事もない、行った事も無いのに色々話を聞いて新聞など読んで都だと信じている。しかしこの「信じる」はイエスの話している「信じる」、信仰と

は違う。モスクワはロシアの都という私が信じる事はただ頭の中の知識に過ぎない。

イエスが話した、起こそうと思った信仰とは、一人一人の生活の中心となる、また生活の基盤となるような信仰だ。神様を信じている、神様の愛を信じている、神様の許しを信じている、神様が自分の事を好きだから自分は良い人だ。貧しい人でも病気の人でも非差別者でも、神様は自分を愛してくださっているから心配する事はない。自己尊敬、自己愛も充分に持っている。劣等感は無い。また自分の為だけでなく他の人をも同じ神様が愛している事は解っているから自分も他の人を愛するよう努力する。自分をたてる為に他の人々を見下す必要もない。皆を愛しながら助け合いながら質素に暮らしながら努力する、これがイエスが話していた信仰だ。

この社会の状況の中で言うと、ひどい貧富の差、抑圧搾取、貧困があって、その支配者は現状維持だった。ファリサイ派の人々はその法律や立法を大事にした。立法を守ることによって人は救われると思っていた。エッセネ派は離れた所で清い綺麗な生活をおくっていた。その清い生活によって救われると思っていた。また武器を持ってローマに対して反乱をおこした人もいたのだ。が、イエスはそうでなくて神様に対して助け合う生活の仕方を教えていた。イエスの教えを実行しようとしたら支配者は支配する事を止めた。抑圧、搾取も止めることになっただろう。貧しい人々は持っている物を分かち合う事にしただろう。こういうふうにイエスは社会を作り変えようと思った。

アメリカにユージン・デベスという労働組合の活動家と政治家がいた。1926年に亡くなったが、その人は総ての人々は兄弟姉妹として暮らす事が出来る事を信じていた。ずっと小さな人々を助ける為に活動して、労働者を守っていたのです。労働者を守っていた為に何回も刑務所に入れられた。ある組合員はデベスの演説を聞いた時に深い感銘を受けた。デベスの情熱を感じて自分も同じように信じるようになったと言っていた。イエスも同じように私達に信仰を起こそうと思っていた。神様を信じて神の国の国民として生きるように。ですから信仰は魔術的な力ではなく、それは神の国を選び穫る率直な決断である。

エクササイズ

次回のセッションの準備として

「キリスト教以前のイエス」　　第八章　神の国と威信
　　第九章　神の国と連帯